

**J** **apanese text**

2010年 秋/冬号 日本語編

茶の湯

**野点・娑婆羅スタイル**

撮影=沼知理枝子、文=編集部、撮影協力=津田家

p.096

(p.096)

まるで金地の漆器や、日本画を彩る金泥を思わせる、柔らかだが深みのある光沢。栃木県足利市が世界に誇る、アルミ加工職人の熟練の成せる技だ。驚くほど軽く、そして優れた耐久性を持つアルミという新しい素材が、伝統の織物・銘仙の柄をまとして、茶の湯の新たな楽しみ方を打ち出す。点前道具一式をコンパクトに持ち運ぶ、現代の「茶箱」が完成した。

左から、茶箱。中にセットされる、菓子器、抹茶を入れる罌、抹茶を点てる茶筌と、茶碗を拭う茶巾を携帯する為の茶笥立て、茶巾筒。茶碗を清め、温めるためのお湯や水を捨てる時に使う道具、建水。菓子皿。抹茶をすくう為の、茶杓。

\*写真はすべて実物大

(p.098)

**Basara 流茶会の始まり〜茶箱に詰まった小宇宙**

飯盒というフォルムにびたりと収まる、点前道具一式。米を炊く際に計量カップとして使う中蓋も、Basara 流お作法の一部として機能する。目にも楽しいのは、着物柄とのコーディネート。時代を先取りするような斬新なデザイン、ポップな色使いで昭和初期にブームを巻き起こした、足利の繊維産業を代表する銘仙織物の柄を再現したもの。

**茶箱セット** 50,000円〜68,000円（お湯を携帯するためのポット含む）

（茶碗、袱紗類、仕覆、茶筌、茶杓は含まない）

\*把っ手・柄・加工により値段の幅あり。\*アルミ部分がシルバーのタイプも。

問い合わせ（販売代理店）：

■ **株式会社 玄**

東京都台東区谷中 5-7-7 Tel.03-5685-9249 Email gen@tctv.ne.jp

p.099

「娑婆羅」とは、室町時代(1336〜1573)の動乱期の中に生まれた美意識や価値観を表す、サンسكريット語を基にした流行語で、奇抜な服装をまとい、伊達で風変わりな、気ままに振る舞う様を意味する。茶道、華道、能楽など、日本文化の源流ともなる芸術や理論が興った時代にあって、娑婆羅文化は自由奔放な生き方を象徴するものだった。

そんな精神を受け継ぐプロジェクトが、娑婆羅気風の地とも言われる、栃木県足利市で立ち上がったのは2007年のこと。日本の産業技術と伝統文化を世界へ発信するという目的で、地域ブランドプロデューサー・政所利子さんのもと、地元企業の集結し、誕生した野点用の茶道具セットが話題を呼んでいる。

茶道具といえば重厚で格式のあるイメージだが、選ばれた素材はなんと、アルミニウム。リサイクル効率が抜群のエコ素材であるアルミで、茶道具や野点用の椅子を製作するのは、大手自動車メーカーに部品を納めるアルミ加工工場をはじめとする、10社で結成したプロジェクトチーム。茶道具の表面を、なめらかな金のような光沢に仕上げるには、ムラなく着色する高度な技術を要する。そんな職人技によって、アルミの硬質な質感は柔らかみを帯びる。

そもそも野点とは、野外で催される気軽な茶席のこと。椅子と卓を使う、立礼式も多い。「屋外でなくても、キッチンやリビングルームでも、パソコン作業中のデスクサイドでも。どんな場所でも、使い手が選ぶ場が茶室となる、それがBasara 流茶席の魅力です」と政所さん。

通常の茶席では、茶碗、茶道具をはじめ、床の間にしつらえる掛軸、花に至るまで、季節のものを揃えたり、客人へのもてなしとして、主人の感性で取り合わせるもの。Basaraの野点セットもまた、道具の一部は自分の好みで組み合わせるようになっている。茶碗は特に、茶箱に収まる大きさの制約があるが、自分流を吟味する分、道具への愛着が湧く。この日の茶席で使われたのは、真っ赤なカフェオレボウル。正式な茶道具である必要はなく、組み合わせは思いのまま。

室町時代の武将達も、陣中では茶を嗜む風流の心を忘れなかった。「実は、Basaraの茶箱をこの形にしたのには、もうひとつ想いが込められているんです。飯盒を、戦場へ持っていく道具ではなく、一服のお茶を楽しんでもらうための道具として使ってほしい」。小さな茶箱の中には、平和を導く大きな願いも詰まっているのだ。

(p.099)

茶箱とコーディネートされた銘仙柄の椅子は、野点の楽しみの幅を広げ

る。こちらはシルバータイプ。茶室でも、アウトドアでも、自由に茶の湯に興じるのが Basara スタイルだ。

椅子 18,000 円～ 38,000 円

\*座面により値段の幅あり。 \*2 脚セットの場合は専用の袋付き。